



記入日	2019 年 12 月 27 日 (2019 年度のチャレンジプラン)
実践団体名	目黒星美学園中学高等学校
実践番号 (団体内・年度内の通し番号)	01 (情報整理術)
タイトル	学校現場で、毎日防災について考えてみた。 (実践の中で発見した課題や疑問を追究し、防災教育に取り組みやすくするための情報整理術)
実践担当者のお名前	京 (社会科・防災係)
実践にかかった金額	ほぼ 0 円
実践の準備にかかった時間	なし
実践活動を実施した日時	毎日/2019 年 5 月・9 月・12 月頃にふり返りと整理
実践の所要時間	—
実践の運営側で動いた人の人数	1 人
防災教育の対象者の属性	教職員
防災教育の対象者の人数	約 1 人→気づいたことを職員室で共有
実践を行った都道府県と市区町村	東京都世田谷区
実践を行った具体的な場所	目黒星美学園中学高等学校 職員室など

達成目標	【目的・目標】 ①日々、学校現場で防災教育に取り組む中で、課題や疑問を発見し、定期的にそれらの解決策を考えたり、原因を追究したりすることで、より良い防災教育の在り方を模索する。 ②本校で起きたことは、他校でも起こり得ることだと思うので、事例として共有することで、防災教育の浸透・継続に貢献できると良いと考える。 【背景・経緯】 これまでの約 5 年間の防災教育の実践の中で、様々な課題、疑問、矛盾、誤解、壁、思わぬ結果が表れる不思議な現象などが次々と生じた。そのことで悩んだり、防災教育へのモチベーションが下がったりもしたが、それらを 1 つ 1 つクリアすることで、また新しい手法やより良い防災教育の在り方を見つけられることに気づいた。また、経験上の 1 つの見方ではあるが、これらの困難が、教員が「時間がない・
------	--



	知識がない」と言って、防災教育に一步踏み出せない状況の背景にあるのではいかとも感じる。 ↓ 今年度、意識して、定期的にそれらのことを分析・整理したことで、モヤモヤしていたことがすっきりし、防災教育に対する教員の心理的負担が減ることに気づいた。次の項目でいくつか具体例を挙げる。
実践内容・方法	①【課題】実践の中で生じた課題等を挙げる。 ②【追究】課題解決に向けた工夫や課題を追究した結果、見えてきたことをまとめる。 ③【解決】どのように課題解決を図ったか、特に今年度の取り組みや工夫を報告する。 そもそもの防災教育の第一歩の踏み出し方で悩む 【課題】防災教育を始める段階で、そもそも、どうすれば防災教育が学校で受け入れられるか悩んだ。真面目に一生懸命防災の大切さを訴えても、なかなか生徒の関心は高まらない。 ↓ 【追究】逆転の発想で、「にこにこしながら、楽しそうに防災減災と言いつづけたら、どうなるか」試してみることにした。 ↓ 【解決】学校全体に、前向きに防災が浸透するようになった。「防災は楽しい」という感情は、教員の防災教育に対するモチベーションの維持にも繋がっている。今年度も日々、防災は楽しいという姿勢で取り組んだ。 防災を頑張っていたら「先生は災害が好き」という謎の誤解が広がる 【課題】防災に楽しく取り組んでいるうちに、「先生は災害が起こるのを喜んでいる」と生徒が誤解し、地震が起こると「嬉しかった？」と聞いてくるようになった。一方で、中1で防災教育を始めようとする「怖いからヤダ」という声が上がることが度々あった。 ↓ 【追究】生徒は災害と防災を同一視して、防災に対してもネガティブ



な感情を抱いていることが、防災教育の妨げになっているのではないかと考えるようになった。実際に中 1 の最初の防災教育の授業で、「防災という言葉聞いて思い浮かぶ気持ち」を書いてもらったところ、「災害をイメージして、辛い気持ち」といった回答が見られた。



【解決】 災害と防災は別物（間逆）であることを、教員自身が、しっかりと認識・理解した上で、生徒が感覚として理解できるように教育する。特に今年度は、教員は災害と防災に関する単語や情報を敢えて書き出し、自分なりの言葉で説明する作業を行った。その上で、繰り返し、生徒に「災害と防災は違います」と言い続けて、防災に対してポジティブな気持ちを持てるように工夫した。

▼【例】教員なりの言葉で説明をまとめてみる。

災害	防災
大きな災害が起こると深刻な被害を受け、つらい経験をすることもある。自然災害の発生を止めることはできないし、日本では様々な災害が頻発している。	これから起こる災害に備えて、やればやるほど、救われる命が増える、未来志向の取り組み。過去に起きた災害の教訓からも学ぶことができる。

教員が張り切って防災に取り組んだ結果、却って生徒の防災依存心を高めるとい矛盾が生じた。

【課題】 初期の頃、教員主導で防災を進めていたところ、授業中に地震が発生した際に「先生が何とかしてくれる」と言って、生徒が身を守る行動を取らないということが発生した。夜や休日に地震が起きた後に、学校にいる時間帯に起きた訳でもないのに、「この学校の生徒で良かった。先生がいるから良かった」という発言がしばしば生徒から聞かれるようになった。



【追究】 教員が張り切って防災に取り組む姿を見せることは、生徒の関心を惹く上でも効果的だが、「先生が守ってくれる」という安心感をむやみに育てるのは、却って、生徒を危険に晒すのではないか。この



ような思いが中高時代までに固定化されることが、防災を行政任せにするなど、なかなか自助意識が高まらない背景にあるのではないか。



【解決】 まず、教員は、「教員が学校として取り組むべき『防災・災害対策』と、生徒に対して行うべき『防災教育』は別物として捉えるべき」と認識する。

…⇒生徒には、「どこにいても何をしていても助かってほしい」という思いを真剣に伝えと共に、**【教員「先生は皆さんを守りま…」生徒「せん！」】**というやり取りを通じて、自分の身は自分で守るという生徒の自助意識を高める。このやり取りが恒例になった結果、地震発生時の生徒の行動が素早くなった。また、学校外で地震が起きた際も、「自分で考えて行動した」という報告をしてくるようになった。ただし、全校朝礼で初めて、宣言をしたときは、生徒はざわついた。やり取りの本質的目的を説明して、理解を得ることが必要。

「防災」って、実は曖昧かも？

【課題】 災害や防災について考えていると、教員に果てしなく、呆然とする気持ちが生じる。一方で、地震の対応も水害の対応も、混同して「結局、防災って何をすればいいの？」と思う生徒も出てくる。



【追究】 「防災」と「災害」と一言でまとめるのではなく、もっと1つ1つ分けて、一步一步取り組んでいった方が良いのではないか。



【解決】 今年度から始めた工夫として、「防災について学ぶ」という表現ではなく、今日はどの災害についての学びなのかを、最初にはっきり宣言してから授業を始めるようにしている。(例:「今日は台風による水害について学びます」「今日は首都直下地震のことを考えます」)

「楽しく防災に取り組むのは不謹慎」という意見を聞く

【課題】 学校外で、「防災に楽しく取り組むなんて言うのは、不謹慎かもしれません…」という発言をしばしば聞くことがあった。



	↓ 【追究】 実践担当者は、東日本大震災発生後、何もできなかったと無力感を感じていた。その中で、「今から防災に取り組めば、将来的に生徒の命を救うことに繋がるのではないかと気づき、希望を見出した。そのため、「防災＝希望」であり、わくわくする気持ちで取り組んでいるので、「防災に楽しむことが不謹慎」という感覚を不思議に感じた。防災と災害を生徒が同一視しているのは、大人の影響ではないかと気づいた。 ↓ 【解決】 まずは、教員に対して、「防災と災害は別物で、防災は楽しく取り組む方が、生徒の教育上も望ましい」ということを説明している。「防災に取り組む＝未来への希望」という視点で、防災教育自体の魅力を、教員視点でアピールしている。防災は、生徒の活躍のチャンスが大きい、課題がたくさんある分、生徒が解決策を考えるいわゆるアクティブラーニング型の授業を作りやすい、色々な教科と親和性が高く、授業内での学習が可能である。今年度は、2教科で連携した防災教育の授業実践を増やすことができた。
得られた成果	実際の実践の中で現れた課題を考察したり、整理したりすることで、その理由が見えて、防災教育がやりやすくなった。防災教育に取り組むことへの心理的負担が減った。
課題・苦労・工夫	課題を客観視して、理由や解決策を考えるのは大変であり、面白くもあります。

★この実践事例を通じてあなたが学んだことや誰かに伝えたいメッセージ	
伝えたい相手	防災教育に取り組みたいと思っている先生方
伝えたい内容	防災教育を始めると、思っていなかった課題が発生することはよくあります。そこで諦めずに、課題解決を目指すと、より良い取り組みが見えてきます。何よりも生徒が成長します。学校現場にどうやって防災を入れ込むか（時間を確保するか）、は課題の1つですが、「防災を教える」の視点だけではなく、「防災『で』教える」の視点で日常を見直すとチャンスがたくさん見つかります。